

のら 川崎市中原区の空襲・戦災を記録する 運動から 会の活動から 現場 運現

なかはら

對馬 芳

神奈川県川崎市は多摩川を境に東京都と接し、そのほぼ中央に位置するのが、私の住む中原区です（面積14・7平方キロメートル、人口約23万6千人／2013年）。

2009年、「私たちの住む中原区にも空襲があったことを記録にとどめたい」という思いをいだいた人びとによって、「川崎中原の空襲・戦災を記録する会」（以下「記録する会」と略記）（川崎市「市民自主企画事業」に採用）が生まれ、2012年11月に『川崎・中原の空襲の記録』が、かわさき市民公益活動助成金事業の援助を受けて刊行されました。

以下は、記録する会の活動について、同会に2011年から参加した私からの報告です。

1945年に入って本格化した米軍による空襲は、工業都市川崎にもおよび、4月15日に最大の損害を被りました。これを川崎大空襲と呼んでいます。この大空襲では、臨海部の重工業地域をはじめとして、南部の市街地が一面の焼け野原となりました。現在の中原区域には、日中戦争の本格化にもなつて多数の軍需工場が進出していたこともあり、大量の爆弾・焼夷弾が投下されました。

この川崎大空襲をはじめ、前後約20回に

およぶ川崎への空襲については、すでに1974年、川崎市の編集によって、大部な『川崎空襲・戦災の記録』全3巻が刊行され、中原区からも40名近くの人びとが体験記を寄せていました。しかし、これらの手記はおもに公募によつたもので、必ずしも網羅的なものではありませんでした。

そこで、自分たちの住む地域のどこでどのような被害があつたのかを、できるだけ子細に知りたい・調べてみたいとして、新たに調査・記録活動が始まつたのです。

記録する会では、中原区全域の被災状況を調べるため、区内全76の町会に申し入れをおこない、町会長から空襲体験者や当時のことを知る方の紹介を得て、聞き取りを開始していきましました。また、商店街を訪ねて空襲時のようすを聞くなど、根気よく調査を続けました。こうして、百人近い方々から証言を得ることができ、いわば、『顔の見える証言集』がまとめられていきましました。証言記録と合わせて、区内に存在した軍需工場の調査も精力的に進められました。その調査結果から、私もこどものころ遊んだことのある大規模な防空壕が、軍需工場の器械・製品の疎開と人員避難兼用の壕であつたことを、半世紀近くあ

とに知るようになります。

こうした記録のとりまとめと並行して、記録する会では、「中原空襲展」や講演会、体験を聞く会などを開催して広報にも努め、小中学校に招かれて証言と報告もおこなつてきました。空襲展は、被災状況について新たな証言が寄せられる場にもなつています。

こうした成果をまとめたものが、上述の『川崎・中原の空襲の記録』です。証言録や概説のほか、被災地点や軍需工場の所在地を1942年当時の地図に一つ一つ記載し、被災状況を現在の街中に置き換えて想起できるようにしています。

『記録』は、協力を仰いだ町会すべてに寄贈し、区内小中学校へも校長会での紹介の機会を得て送り届け、会員は、現在、区民への頒布普及に取り組んでいます。

（つしま・つとむ／本誌編集委員）
『川崎・中原の空襲の記録』入手ご希望の方は、30の会事務局まで二報ください。



『川崎・中原の空襲の記録』所収被災地図